

# 「方丈」と「池亭」の中目比較について

―「方丈記」と「池亭記」と「池上篇並序」を巡って―

張 利 利

要 約 『方丈記』と慶滋保胤・兼明親王の「池亭記」と白楽天の「池上篇並序」の先行文学の三作品には、いずれも隠遁生活の住居である「方丈」の居室と「池亭」という住居を巡っての記述がある。『方丈記』と「池亭記」（慶滋保胤・兼明親王）との題名について、金子彦二郎は「これは、平安時代の水辺文学形相から、鎌倉時代の山の文学の形相への推移もあつた。」と述べ、又、白楽天の「草堂記」を含めて、「池亭記」との比較を行う時、「その居室の規模の特徴を冠せしめて方丈記と呼びなしたもので、すくなくとも、趣意理念に於いては同一である。」と述べている。時代の推移と共に、作者の観念や追求したものには違いがあるはずである。『方丈記』と先行文学の「池亭」との趣意理念に於いて、どう変わっているのか、鴨長明はどのような独自性を持っている

のか、本論では「池」、及び「水」は先行文学の中に何を意味しているのかを検討した上、『方丈記』との比較・探究を行った。

「池」について、各解釈によると、「水を溜めている所」・「護城河」・「城」という三つの意がある。『和漢朗詠集』・『本朝続文粹』等に、「池」に関連する作によると、「池」は次のような幾種類が見られる。その一つは、皇帝や皇居に関する場所を指すことである。その二つは、仁智者の好む場所として雰囲気醸成する不可欠の設備である。慶滋保胤の「池亭記」には「若有余興者。与小童乘小船。」とあつて、彼の「池」は生活環境を楽しむ場所

として記述している。兼明親王の「池亭記」は「亭在曲池之北、小山之西、傍山臨水、結茅開宇。」とあつて、「池」の位置を記述して「自從草創此亭、尤合心事矣。」とあつて、「池」は住居の周りの一つの視覚の楽しみである。白楽天は、「水は万物を利益を与えながら、決して全てと争わない」という「水」に対する愛着心を込めてい

る。これらの先行文学の趣向意識に対して、鴨長明は「南に懸樋あり、岩を立てて水をためたり」という、淡々とした記述を持って、先行文学の伝統意識を捨てて、「水」を最小限の生活条件と

なっている、という『方丈記』の独自性を明らかにした。

『方丈記』と慶滋保胤・兼明親王の「池亭記」と白楽天の「池上篇並序」の先行文学の三作品には、何れも隱遁生活の住居である「方丈」の居室と「池亭」という住居を巡っての記述がある。

『方丈記』と「池亭記」（慶滋保胤と兼明親王）との題名について、金子彦二郎は、「これは、平安時代の水辺文学形相から、鎌倉時代の山の文学の形相への推移もあった」と述べ、また、白楽天の草堂記も含めて、「池亭記」との比較を行う時、「その居室の規模の特徴を冠せしめて方丈記と呼びなしたもので、すくなくとも、趣意理念に於いては同一である」と述べている。時代の推移によって、文学表現の形式が違ってきたことは確かであるが、時代の推移と共に、作者の観念や追求したものには、違いがあるはずであると思う。では、『方丈記』と先行文学作の「池亭」との趣意理念に於いて、どう変わっているのか、長明はどのような独自性を持っているのか。本論では「池」を再検討した上、『方丈記』と先行文学との比較・探究を行いたい。

「池」については先行文学の中に次のように記述されている。

○ 地方都盧十有余畝。就隆為小山。遇窪穿小池。

（地方都盧十有余畝。隆きに就きては小山を為り、窪に遇

ひては小池を穿つ。） 「池亭記」（慶滋保胤）

○ 如今垂老、病根漸深、世情弥浅。七不堪、二不可、併在一身。

自從草創此亭、尤合心事矣。

（如今老に垂として、病根漸く深く、世情弥浅し。

七の不堪、二の不可、併ら一身に在り。この亭を草創

せしより、尤も心事に合へり。）

○ 亭在曲池之北、小山之西。傍山臨流、結茅開宇。

（亭は曲池の北、小山の西に在り。山に傍ひ流れに臨み、

茅を結び宇を開けり。） 「池亭記」（兼明親王）

○ 地方十七畝。屋室三之一。水五之一。竹九之一。

（地は方十七畝にして、屋室は三が一、水は五が一、竹は

九が一なり。） 「池上篇並序」（序）（白楽天）

右の記述のように、慶滋保胤の「池亭記」は、「遇窪穿小池」とあつて、「池」があることは明確である。兼明親王の「池亭記」にも、「亭在曲池之北」とあつて、「池」がある。白楽天の「池上篇並序」には「水五之一」とあつて、その「水」を池水だと理解してもよからう。又、慶滋保胤の「池亭記」と兼明親王の「池亭記」及び白楽天の「池上篇並序」という題そのものの中に「池」がある。

即ち、先行文学の中の、住居の範囲内には何れも「池」がある。

『方丈記』の中に、「池」があるという特に強調していないが、

『方丈記』の中には、

「その所のさまをいはば、南に懸樋あり、岩を立てて水をためたり。林の近ければ、爪木をひろふに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら跡埋めり。谷しげけれど西晴れたり。

観念のたよりなきにしもあらず。」

とあって、蓄水設備（石槽）があると思われる。「池亭」の「池」について、『方丈記』との関連研究に於いては、今までに言及したものは皆無であろうし、『方丈記』のこの「水」について「最小限の生活条件」<sup>注</sup>であるという程度である。「方丈」と「池亭」の中日比較を行うため、先ず、ここで、「池亭」の「池」についての考察をして見たい。

「池」について次のような解釈がある。

【池】「沱」と同じ。もと揚子江の一支流の名。故に「さんずい」の扁。它是音符它と也とは同字、転じてイケの意。

水たまり、水を溜める所。「城」城池、都市の意。

『中日大辞典』（小学館）

「西都の賦、李善注」に引く、「説文」に、「城に水有るを池と曰ふ」とあって、城池の意とする。字形よりいえば、水流がはみ出て、傍流し、そのまま停蓄したことを示す字である。

『字通』（白川静）

【池】長く水を引いた通路。のち横に広がった大きいため池

をいう。【池上】池の水の上。池のほとり。【池亭】池のほとりにあるあずまや。

『学研 漢和大辞典』（藤堂明保）

【池】池・プール。湖・地名用。池の形のもの、浴槽・「楽池」オウケストラボックス。堀・「護城河」「城池」城壁と堀。『中国語大辞典』（角川書店）

【池】（名）「つのはさばふ磐余の伊開（イケ）の水下ふ魚も上に出で嘆く」（継体紀七年）「又是之御世作依網池亦作輕之酒折池也」（崇神記）「華鮎躍於銀沼」（遊神窟真福寺本）「池（以介）、蓄水也」（和名抄）【考】池は用水をためておくことから出た語らしい。やがて、耕作の用水池のみならず、庭園の景物として設けられるようになる。

『国語大辞典』（三省堂）

【池】池塘。『荀子・王制』「汚池淵沼川澤。」（汚池 水を蓄

した池塘 淵沼 水の深い池）護城河。『韓非子・存韓』

「築城池以守固。」『古漢語常用字典』（商務印書館）

右の解釈を纏めて見ると、「池」には、水を溜めている所。堀・護城河。城池。と言つ三つの意がある。

『和漢朗詠集』『本朝続文粹』等に、「池」に関連する作が、次のように幾種類が見られる。

一 皇帝や皇居に関する場所を指す。

『和漢朗詠集』「春」に次のような作が収められている。

○ 81 長樂の鐘の聲は花の外に尽きぬ 龍池の柳の色は雨の  
中に深し (李嶠)

長樂鐘聲花外尽 龍池柳色雨中深 (李嶠)

右の「龍池」は、玄宗皇帝が遊んだ興慶宮の庭を指す。

○ 521 鳳池の後面は新秋の月 龍闕の前頭は薄暮の山 (白)  
鳳池後面新秋月 龍闕前頭薄暮山 (白)

右の「鳳池」は、皇宮にある中書省のことを鳳凰池というが、その「鳳凰池」の略称である。

『文華秀麗集』巻上「遊覧」に次のような作が収められている。

○ 秋日冷然院の新林の池 探りて「池」の字を得たり。 應製。  
一首。令製

11 君王本自幽趣に耽り、泉石初めて看すに此の地奇し。積  
水全く含む湖裏の色を、重巖謝らず破中の危きを。徑に  
栽つる晚竹春餘の粉、歳浅き新林未だ拱かぬ枝。景物仍し  
聖目を遊ばしむるに堪えぬ、何ぞ勞かむ整駕して瑤池に向  
かはむことを。

秋日冷然院新林池。探得池字。應製。一首。令製

君王本自耽幽趣。泉石初看此地奇。積水全含湖裏色。重巖不

謝破中危。徑栽晚竹春餘粉。歳浅新林未拱枝。景物仍堪遊聖  
目。何勞整駕向瑤池。

冷然院の新しく出来上がった林池（庭園、林泉）を詠んだ詩である。冷然院は嵯峨天皇の別院で、後に冷泉院に改める。この「池」は、木の緑を池のような風景にする、又、憧れる地であると表すものであると思う。文末にある「瑤池」は崑崙山にあるという仙女西王母の住所の傍らの池（唐杜甫、秋興八首「西望瑤池降王母」）を言う。

○ 秋夕南池の亭子にして臨眺す。一首。令製

12 池亭氣冷秋風度、吹入波心乱水文。名月東山看漸出。莫愁白  
名月東山に看漸くに出づ、愁ふること莫れ白日巖頭に曝  
るるを。

秋夕南池亭子臨眺。一首。令製

池亭氣冷秋風度。吹入波心乱水文。名月東山看漸出。莫愁白  
日巖頭曝。

南池の四阿（あずまや）から眺めやつた詩である。この「南池」は、皇太弟（淳和）の邸宅の池を指しているが、「幸皇太弟南池」（『類聚国史』）などの表記から、「南池」が淳和皇太弟の邸宅の名でもある、と言えるだろう。

二 風景

『和漢朗詠集』「春」に次のような作が収められている。

○114 池の色溶々として藍水を染む 花の光焰々として火春を

焼く

(白)

池色溶々藍染水 花光焰々火焼春

(白)

○66 台頭に酒有り 鶯客を呼ばふ 水面に塵無くして風池を洗ふ

(白)

台頭有酒鶯呼客 水面無塵風洗池

(白)

『本朝統文粹』に次のような作が収められている。

○七言。暮春幸白河院。同賦水上落花輕。應製詩二首。藤原

實網朝臣

夫白河院者。本是大相国昭宣公之幽居。今即博陸侯右丞相之別業也。城闕占隣。足以全君臣之節。山水遇境。足以樂仁智之心。曲岸春柳。太公之釣垂絲。迴塘秋波。魏徵之鏡開闢。觸時之興自然。爰禪定仙院。(後略)

『本朝統文粹』(六九三頁)

○七言。春陪戸部尚書垂相水閣。賦松影浮池水應教詩一首。

藤前都督

夫神泉苑東。教業坊裏。有一名區。昔是中書大王賞時節。今亦戸部垂相。樂仁智之地。泉石清冷。春卿水之流更垂。(中

略) 觀夫池頭有松。水面浮影。(後略) 仙鶴屢翥翅分高低之

霜。女羅斜臨。色動混養之浪者矣。既而玉爵醉深。瀛州長生

之味頻率勸。(後略)

右のように、白楽天の詩の「池」は、いずれも、風景の美しいことを描いている。藤原實網と藤前都督の作の関係部分を挙げて見たが、次のような共通性が見られる。話の背景に於いて、一つは、

場所として、何れも戸部垂相と博陸侯右丞相という人物の邸宅或いは別荘である。二つは、實網の「山水遇境。足以樂仁智之心。」と藤前都督の「樂仁智之地。泉石清冷。春卿水之流更垂。」とあって、「池」がある所は仁智者が楽しむ場所である。「仁智者

は山水を楽しむ」については、孔子の『論語』「壅也第六」に「子曰、

知者樂山。仁者樂水」注によるものである。『本朝統文粹』の巻九

に、「池」に関する詩文がかなり多いのであるが、殆ど邸宅・山

水(池)・神仙の地ということを描いているのである。右に挙げ

ている藤原實網と藤前都督の文も例外ではなく、「仙窟」と「瀛

州」にも触れている。即ち、平安時代の漢文詩の「池」に関する

作の中に、「池」は仁智者の好む場所として、神仙の地の雰囲気

を醸成する不可欠の設備として、作品の中に使われたものである。

このような創作構造は、皇族や貴族の邸第を賛美した作品が多い

ということと関連していると思われる。

保胤の「隆きに就きては小山を為り、窪に遇ひては小池を穿つ」の中の「山・池」は、其の時代の潮流の影響も受けないことはあるまい。彼の「池亭記」の中に、住居の場所を記述した文に、

「上挾蕭相国窮僻之地。下慕仲長統清廣之居。」

(上は蕭相国が窮僻の地を挾び、下は仲長統が清廣の居を慕ふ。)

と、又日常座が記述された文に、

「夫漢文皇帝為異代之主。(中略)唐白楽天為異代之師。(中略)晋朝七賢為異代之友。」

(夫れ漢の文皇帝を異代の主と為す。(中略)唐の白楽天を異代の師と為す。)

(中略)晋朝の七賢を異代の友を為す。)

とあつて、中国の古賢への崇拜心を日常生活にまで貫いている。

従つて、彼の「山・池」は単なる庭の風景を設けるだけではなく、古賢の崇拜と儒教思想に支えられている保胤にとつては、「山・池」に於いても、仁者・智者を憧れる象徴の意味もあるはずである。

兼明親王の「亭在曲池之北。小山之西。傍山臨水。結茅開宇。」は、自分の住居を池と山のある地にした訳である。唯、この「池」は、保胤の人工で作った「池」ではなく、自然のものである。

保胤は、「若有余興者。与小童乘小船」とあつて、彼の「池」を生

活環境の風景を楽しむ場所として見なしているのである。兼明親王は、「自從草創此亭、尤合心事矣。」であるので、「池」は「亭」の周りの一つの風物であり、視覚の楽しみである。

白楽天の「池」に関する詩がかなりあるが、大体二種類に分けられる。一つは、住居の庭の風物として、視覚の楽しみである。

つまり、閑居の楽しみのものである。二つは、「池」、即ち、彼の住居の「水五之一」の「水」と言うものには、彼にとつては特別の意味が表されている。彼の他の詩をそれぞれ例に挙げて見たい。

○ 池上即事注

行尋磬石引新泉。

坐看修橋補釣船。

緑竹掛衣涼處歇。

清風展簟困時眠。

身閑當貴真天爵。

官散無憂即地仙。

林下水邊無厭日。

便堪終老豈論年。

池上即事

行いて磬石を尋ねて新泉を引き、

坐して修橋を見て釣船を補ふ。

緑竹に衣掛けて涼處に歇ひ、

清風に簟を展べて困時に眠る。

身閑にして貴に當るは真に天爵、

官散にして憂なきは即ち地仙。

林下水邊厭くこと無き日、

便ち終老するに堪へたり豈年を論ぜ

んや。

池辺の即興を述べた詩である。行きては石畳の処に就いて泉流を引き、坐して長い橋の処で釣船を修理し、緑竹に著物を掛けて涼

しい場所を選んで憩い、清風に簾を展べて勞れた時には昼寝する。身の閑暇多きは富貴の人のように、誠に天爵を得たるが如く、閑職に在りて何の憂もなく全く地上の仙人の如くである。林下池上厭く所を知らず、永く此に吾が生涯を終えることができる。林下池辺での生活は、飽く事無く、生涯を送ることができるといふ。楽天の水に対する執着心がどんなに強いかを、良く感じさせる。彼は何故水に対してこんな心情を抱くのか、もう一つの執心があ

る。作品の例を挙げて見ると、

○ 池上竹下作注 池上竹下の作すく

穿籬遙舍碧透聆

籬りを穿ちち舎を遠りて碧みどり透い聆み

十畝閑居半是池

十畝は閑居かんきよ半な是は池いけ

食飽窓間新眠後

食あは飽あく窓間まどま新あたらに眠ねむ後のち

脚輕林下独行時

脚あしは輕かろし林下りんか独ひとり行ゆく時とき

水能性淡為吾友

水みづは能よく性せい淡たんくして吾わが友ともたり、

竹解心虚即我師

竹たけは解とく心虚こころのまにして即すはち我わが師し

何必悠悠人世上

何なんぞ必かならずしも悠い悠うたる人じん世せいの上うへ

老心費目覓親知

心こころを勞うし目めを費つて親知しんちを覓もとめん。

池上竹下の閑居生活を叙した詩である。籬を穿ち家を巡って竹が緑に連なり、十畝の宅地は半は池である。食後には、竹窓の間に午眠を貪り、目覚めれば脚も軽々と林下を逍遙する。池の水は淡

くして吾が友たるに適し、竹は心が空虚で吾が師となすに足る。だから悠悠たる世上に心目を費やして親知を求める必要はない。この「水は能く性淡くして吾が友たり」には、水に対する見方、執着心が見られる。即ち、水の「独善」の生活の中で、大

事は意味を持つものである。水について、『老子』「易性第八」に

唯不爭、故無尤。注

「上善は水の若し。水善く万物を利して争はず。衆人の悪

む所に處る。故に道に幾し。居には地を善しとし、心は淵な

るを善しとし、興ふるには仁なるを善しとし、言は信なるを善

しとし、政は治まるを善しとし、事には能なるを善しとし、動

くには時なるを善しとす。夫れ唯争はず、故に尤無し。」

とある。これは白樂天の水に対する愛着の拠り所だろう。最上の善は水のようなものである。水は万物に利益を与えながら、決して全てとは争わないからである。つまり、池、所謂「水」は、心が穏やかで、且つ安らかにできるようにさせられる友のようである。従って、「池」は、隱遁者にとって養志の地としての不可欠の設備であると思われる。

文頭に挙げている『方丈記』の文のように、

「その所のさまをいはいはば、南に懸樋あり、岩を立てて水をためたり。林の木近ければ、爪木をひろふに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら跡埋めり。谷しげけれど西晴れたり。観念のたよりなきにしもあらず。」

とあるが、文面から見ると、長明は、ただ自分の住居の周囲を紹介しているに過ぎないようである。しかし、実質から言えば、先行文学と同じように、「懸樋あり、岩を立てて水をためたり」という、水を溜めていることは、「水」があると考えたい。又、住居の所在地を「名を音羽山といふ」とあって、「山」もある。言わば、長明の隠遁生活の地にも水と山がある。しかし、長明の水と山は、保胤と兼明親王の「智仁者楽山水」のみの「楽しむ」ではないと思う。では、長明のこの水は何を意味しているのだろうか。武田孝は、「算、溜められた水、爪木、と、毎日の生活に密着したものが挙げられている。世捨て人にも、生きていくためには、最小限に必要なものがあることを、我々も、改めて知らされる思いがする。」<sup>注</sup>と述べている。長明は自分の庵を結んだ当初、「所を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、うちおほひを敷きて、継ぎ目ごとに掛け金をかけたり。もし、心になはぬことあらば、安く外へ移さむがためなり。」という

固定した住居ではなく考えて、庵を「末葉の宿り」・「旅人の一夜の宿」・「仮の宿り」だと見ていたので、その住居と周りには、殆ど手を入れようとしなかった。警え手を入れても、自然のままにする。水に関しての設備も同じである。長明の「水」というイメージを、先行文学のそれと比べて見れば分かると思う。

慶滋保胤「池亭記」

池 緑松島・紅鯉・小橋・小船

兼明親王「池亭記」

池 冬の氷・南島（南島の松）・月波

・池水緑・岸葉紅

白楽天「池上篇並序」

水 中島亭・波月・白蓮・橋・船

鴨長明『方丈記』

水 懸樋（竹）・岩

右を見れば、長明の「水」のイメージとして、特徴が顕著である。その一つは、長明の水の溜め方は、中国文化に示される「池」と全く雰囲気の違いを持つていることである。特に、使った道具の竹の筒（懸樋）と岩も、日本文化にしかない風流と素朴という印象が強いものである。所謂、設備を作る場合にしても、自然の物をそのままに利用する。警え手を入れるとしても、「自然のまま」のように保つことである。一つは、『方丈記』の「水」から、長明の素朴な性格と素直な生活振りが見られることである。長明には隠遁の日常生活の中でも、保胤と兼明親王にあるような古賢の崇拜意識もなく、白楽天にある「水を友にし竹を師と成

す」のような物の偶像意識もない。ただ自分の生活範囲を自分だけの空間にして、素直な生活態度を取る訳である。三つ目は、長明の竹の筒と岩とで組み立てた蓄水設備は、静かで寂しい雰囲気、静かである。彼の「静かなるを望みとし」という主題性が強い。又、ここで言及したいが、『方丈記』に、「その西に閼伽棚をつくり」とあって、「水」を供養物にした。

即ち、「水辺文学形相から、山の文学の形相への推移」であると共に、『方丈記』が先行文学の生活環境の中に不可欠の設備である「池」を外し、「池」を楽しんだものを捨てて、最小限の生活条件としたことは大きな変化である。『方丈記』が独自の文学として形成されていることを明らかにした。

注

- 金子彦二郎著『平安時代文学と白氏文集』第二卷(二四八―二四九頁)(講談社、一九四八年)  
武田孝著『方丈記全釈』(二七六頁)(笠間書院、平成七年九月)  
川口久雄ら校注『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(六七頁)(岩波書店、昭和四〇年一月)  
注 同じ、(一八三頁)  
小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(二〇六頁)

(岩波書店、昭和三九年六月)

注 同じ、(二〇七頁)

『本朝統文粹』(六七三―六七四頁)、「日本文学大系」第四二卷(国民図書、昭和二年一月)

小島憲之校注『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(一二二頁頭注四五)(岩波書店、昭和三九年六月)

佐久節訳『白楽天全詩集』第三卷(九一―一頁)(誠進社、昭和五年七月)

注 同じ(五九五頁)

安部吉雄ら著『老子 莊子・上』(二三頁)、「新釈漢文大系」七(明治書院、昭和四年一月)

武田孝著『方丈記全釈』(二七六頁)(笠間書院、平成七年九月)

高松大学紀要

第 43 号

平成17年 2月25日 印刷

平成17年 2月28日 発行

編集発行 高松大学  
高松短期大学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811